

主 題：イエスという名に相応しいお方

聖書箇所：マタイの福音書 1章18－25節

今町に出ると、私たちクリスチャンはいろいろな所から讃美歌が聞こえるので、とてもうれしい気持ちになるのですが、同時に、非常に悲しく残念にも思う、そのような季節でもあります。というのは、余りにも多くの人々が、なぜこのクリスマスがすばらしいのかそのことを知らずにクリスマスを過ごしておられるからで、それは心痛むことです。クリスマスはすばらしい日です。私たちが大いに神に感謝をささげる日です。私たち一人一人、日本人であっても、このクリスマスはとても大切な日です。なぜなら、神のことばはそのことを私たちに教えてくれるのです。今日もみなさんといっしょに、このイエスとはいったいどれなのか、この方はどういうお方であったのか、そのことをクリスマスの出来事を通して学んで行きたいと思えます。

マタイ1：18からみことばを見てください。

「イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。：19 夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。：20 彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現われて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。：21 マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」：22 このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。：23 「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）：24 ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、：25 そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。」

☆イエスとはいったいどれなのか？

ここから私たちは今日、**天使の証言とマタイの証言**、この二人の証言を見ます。というのは、二人は私たちにイエスがだれであるかを教えてくれるからです。まず、天使の証言を見ましょう。

1. 天使の証言

天使がヨセフに夢の中に現われてこのようなことを言ったと20節のところから記されています。そのことを学んで行く前に、少し、ユダヤ人の結婚というものを知っておくことが必要です。今みことばを見ましたが、誤解を招き兼ねないことがあるからです。ユダヤ人の結婚はほとんどの場合が見合い結婚です。親が結婚相手を決めます。恐らくこの二人も非常に若かったと思います。ある説によると、マリヤは高校生くらいではないかと、そうでなくても18才を越えることはなく、ヨセフも恐らく20才までの青年であったろうと言われています。その当時はそのような年齢で結婚したのです。彼らはまず婚約をします。婚約をすると結婚したと見なされるのです。「ふたりがまだいっしょにならないうちに」とあるのは、二人がまだ生活を始める前のことです。そのときでももうすでに、マリヤはヨセフの妻であり、ヨセフはマリヤの夫なのです。ですから、婚約をしたときに彼らは夫婦と認められたのです。ところが、夫婦と認められても彼らは1年間はいっしょに生活はしません。なぜなら、その1年間は女性にとって試みの期間でもあるからです。ほんとうにきよい状態で結婚したということを証明するために1年間おいたのです。1年間いっしょに生活をしない状態を保ち、1年後に夫が妻を迎えに来ていっしょの生活が始まるのです。ですから、18節では「ふたりがまだいっしょにならないうちに、」、肉体関係をもたない間ということを行っているのです。このような社会背景でのことです。さて続いて、「**身重になったことがわかった。**」と、マリヤの妊娠が分かります。彼女自身がそのことに気付きました。マリヤには天使がすでに現われて、あなたは男の子を産むと告げられています。そのことが実際に起こったのです。マリヤは夫であるヨセフにそのことを話します。先ほど見たとおりに、1年間の婚約期間中に女性が子どもを産むようなことになってしまったら、不貞を働いたということで彼らは離縁をしたのです。その方法は二つありました。一つは、公に裁判に訴えて彼女をさらし者にすること、それによって皆がそのことを知ります。もう一つは、内密に離縁状を渡すことで離婚する方法です。この当時は二人の証人がいればその離縁状をもって離婚を成立させることができたのです。ヨセフが選択したのは後者の方でした。なぜそうしたのでしょ？19節に「**夫のヨセフは正しい人であって**」とあるように、ヨセフは神の前に正しいことをしようとする人だったからです。だから、このような悲しい結果になった、自分の妻が不貞を働いて（彼はそう思っていたのです）妊娠してしまった、これは神のみこころに反することだから、彼女を離縁しなければならぬと。同時に彼はマリヤを非常に愛していたようです。「**彼女をさ**

らし者にはしたくなかったので」と、人々の前で彼女に恥をかかせることはしたくなかったのです。だから彼はマリヤを「内密に去らせようと決めた。」のです。

このようなことが起こったことを私たちはこの箇所から知っていますが、この出来事は私たちにあることを明らかにしてくれます。それはマリヤが身ごもったという事実です。だから、ヨセフは離婚しようとしたのです。みことばに反しているからです。マリヤは子どもを宿している、自分はその父親ではない、彼女は不貞を働いたのだとヨセフは思うのです。ヨセフがどのようにしようかと思ひ巡らしていたとき、主の使い、天使が夢に現われてこのようなことを告げるのです。「**ダビデの子ヨセフ。恐れないうあなた**の妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。」と、天使が彼に教えたことは「確かに彼女は妊娠している、しかし、それは彼女が不貞を働いたからではない、姦淫を犯したからではない、実は彼女は聖霊によって身ごもったのだ」ということです。つまり、この受胎は神のみわざであって奇蹟であることを天使はヨセフに告げたのです。神のみわざであることを教えたのです。

そして、天使はヨセフに、21節「**マリヤは男の子を産みます。**」と告げ、なぜこのようなことが起こったのか、その説明を加えて行くのです。「**その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。**」と言います。これがイエスのお産まれになった目的なのです。イエス・キリストがこの世に来られた目的がここに記されているのです。このことばの並び方を見たとき、「この方こそ」が強調されています。これが大切なのです。この方は何をしてくれるのか？罪から救ってくれると言います。そのためにこの方はお産まれになったのだと。聖書を見ると、イエスが繰り返し「わたしは世をさばくためではなく世を救うために来た」ということを言っておられることが分かります。なぜなら、それがイエスがこの世に来られた目的だからです。人の罪を赦すために来られたのです。イエスは病人をいやされたとき「あなたの罪は赦された」と言われますが、それを聞いた律法学者や祭司たちは反論します。「罪を赦すことができるのは神だけだ！」とイエスに向かって怒りを燃やすのです。しかし、イエスはそのためにこの世に来られたのです。私たち日本人にとってこの「罪」ということばは理解し難いことかもしれません。「罪」と聞くと自分とは関係のない別世界の話のように感じてしまうのです。刑務所にいる人々とか、裁判を受けている人のように法を犯した人々と思ってしまう。多くの人は聖書から「あなたは罪人です」と聞かされると抵抗を感じます。何も悪いことをしているはずはないし、これまででもしてこなかったと。しかし、そのように言われるのは「神」です。この社会が私たちを罪人呼ばわりするのは私たちがこの社会の法律を破ったときです。神が私たちを罪人と呼んでいるのは、私たちが神の法律を犯しているからです。神が私たちに命じたことは、すべての点で正しくきよくあれということです。パリサイ人や律法学者たちは「私たちはきよい」としていました。なぜなら、自分たちの行ないが正しいと思っていたからです。イエスは問題は「心だ」と言われました。心はどう？と。確かに罪といわれることを行なったことはないとしても、そのような思いを持たなかったかと問われたとき、彼らは返答のしようがなかったのです。神の命じることに心の中で逆らったことがないかと言われると、私たちは例外なくそのようなことは守れるはずはないと答えるはずで。だから、神は私たちに言われるのです。「あなたがたはわたしの命じることをことごとく犯している、だから罪人だ」と。私たちの罪を赦すためにイエスはこの世に来てくださった、それが21節に記されていることです。イエス・キリストこそ、私たちをそのすべての罪から救ってくださるお方だと天使は告げたのです。

天使は男の子が産まれるとただただではなかった、その名前まで命令するのです。この名前にしなければならぬと。その名は「イエス」です。旧約聖書では「ヨシュア」という名が出てきます。同じ意味です。「主は救い、神は救い」という意味です。その名をもった男の子はたくさんいました。親は期待していたのです。救い主が来てくださって私たち人間の罪を赦してくださる、その日が早く訪れることを期待してこの名をつけたのです。イエス・キリストがそれと違ったことは、この名を天使が告げたところから。産まれてくる子は「主は救いである、神は救いである」という名にしなければならぬと言います。なぜなら、この方が私たちを罪から救い出してくださる救世主だからです。救い主が来てくださったのです。これが天使がヨセフに教えたことでした。天使の証言はイエスが救世主であることを明確にしました。それによって私たちはイエスがだれであるかを知ることができるのです。

2. マタイの証言

22-23節を見ると、イエスがだれであるのかをマタイが証言しています。というのは、ここを見て分かるように、天使の説明があってその後何が起こったのか24節につながります。「**24 ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、**」とあります。22-23節はマタイが説明を加えていることです。実は、この出来事は旧約聖書で預言されていたことが実現したのだと言います。だから、マタイの説明を見ると、私たちはこのイエスがだれなのかを知ることができるのです。「**22 このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。**」とあります。こ

の預言者とはだれでしょう？イザヤです。旧約聖書イザヤ書7：14を見てください。マタイが引用した預言が出てくるのですが、それを見る前に、この7章の背景を簡単に見てみましょう。イスラエルという国は北王国と南王国に分かれていました。南王国のユダ、そこにアラムの王レツィンと北王国の王ペカがやって来ます。同盟を結んでアッシリヤと戦おうというのです。そのときに、ユダの王であったアハズはそれはできないとその要請を断ります。そこで、北イスラエルとアラムが南王国ユダを圧迫し始めるのです。そうすると、アハズはあわてて神に助けを求めないでアッシリヤに求めるのです。そのようなことがあったのです。このことは列王記第二16章に出てきます。そのことを覚えながらこの箇所を見て行きましょう。7：10から「**主は再び、アハズに告げてこう仰せられた。：11 「あなたの神、主から、しるしを求めよ。よみの深み、あるいは、上の高いところから。」：12**するとアハズは言った。「**私は求めません。主を試みません。**」、イザヤに対して神はアハズの所に行ってこのように言いなさい、神が必ずイスラエルの民を守ってくれる、だから、人に頼るのではなく神にしっかり信頼して神に頼って行きなさいと、そのメッセージをアハズに伝えるように言いました。そして、神がほんとうにその通りしてくださる約束のためにしるしを求めなさいと。ところがアハズは「**私は求めません。主を試みません。**」と神には頼らないと言います。神に頼らずアッシリヤに頼るとというのが彼の答えでした。13節「**：13**そこでイザヤは言った。「**さあ、聞け。ダビデの家よ。あなたがたは、人々を煩わすのは小さなこととし、私の神までも煩わすのか。**」と、彼らは神になかなか心を開こうとしない、だから、あなたは求めなかったけれど、神は一つのしるしを与えようとされる、神が守ると仰せられると守ると、そのことを明らかにするのです。

14節「**それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。**」とこのような約束が与えられた、これが一つのしるしである、一人の男の子が産まれる、それが神があなたがたを守るという約束なのだと、それがここで語られたことです。確かにこの後イザヤは子どもを得ます。そして、このイスラエルとアラムの王は両方とも死に絶えてしまいます。神は必ず守ってくださるということを証明されたのです。でもこの預言はイザヤの子どもだけへの預言だったのでしょうか？また、子どものことを預言していたのか？マタイはそうではないと教えてくれます。実は神の民は守られている、神がしっかり守ってくださるということを神が証明するために、一人の男の子が与えられたのです。

マタイ1章に戻って、23節に今見たイザヤ7：14のみことばが引用されています。「**見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。**」（訳すと、**神は私たちとともにおられる、という意味である。**）。神は約束されたことを必ずお守りになるお方です。神が言われたら必ずそうなります。救うといえば救うし、さばくといえばさばく。だから、聖書が教える神のメッセージはその通りになって行きます。一人の男の子が処女から産まれ、その名はインマヌエルと呼ばれると言います。インマヌエル、イムということばと、ヌ、エルが合成してできたことばです。「神は私たちとともにいる」という意味です。旧約聖書の時代を見たとき、私たちがいつも教えられてきたことは、イスラエルの民と神はいつもともにあったことです。荒野をさまよっていたときも、どんなときにも神は彼らといっしょにいてくださった、神は私たちとともにいてくださるということです。しかし、ここでマタイが証言したことは、確かに神はどこにでもともにおられる、神の臨在を離れてどこにも逃れることはできない、地の果てに行っても天の果てに行っても私たちはそこでも神の臨在から逃れることはできないと、そのように神がいつも私たちとともにおられるということではなく、神が私たち人間の間に人となって来てくださって、私たちの間に住んでくださったということです。つまり、霊であるゆえに人が見ることのできない全知全能のまことの神が、私たちの住む世に人となって住んでくださった、そのことです。神が私たちのところに来てくださったのです。人としてこの世に産まれてくださったのです。それは私たちに何を教えているのでしょうか？マタイがこの説明を加えることによって私たちに伝えたかったことというのは、この産まれたみどりごイエスという人物は、神が人となってこの世に来てくださったその方である、人となられた神なのだということです。これがマタイの証言なのです。だから、先に天使が言いました。このイエスは私たちの罪を赦すために来てくださった救世主だと。そして、マタイはこのイエスは人となられた神だと言うのです。

○なぜ、神が人となられたのか？

なぜ神が人となってこの世に来ることが必要だったのでしょうか？それと救い主とはどのように関係しているのでしょうか？そのことを私たちは新約聖書へブル人への手紙2章でその答えを見ることができます。2：14「**そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。**」とこのように書かれています。「**子たちは**」とは人間です。人間はみな例外なく血と肉とを持っている、「**主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。**」と、「**これらのもの**」とは血と肉です。「**お持ちになりました。**」とこれが非常に大切なところです。これは本来自分自身のものでないものを持つことです。ある目的のためにそれを持つのです。神は私たちが持っている肉体をもってはお

られません。霊です。その方が本来自分のものでないこの人間のからだというものを持ってこの世に來られた、それにはある目的があったのです。しかもこの「お持ちになりました。」ということばは制限の意味を含んでいるのです。確かに血と肉を持たれ私たちと同じようになられたのですが、一つだけ私たちと違うところがあったのです。それは同じヘブルの4：15に「**私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。**」と、私たちが経験する様々な苦しみ悲しみ、空腹や渇きなどすべてのことを経験されたのですが、私たちと違うただ一つの点は、この方には罪がなかったということだと言います。ですから、2：14にもどって、人間が例外なく血と肉とを持っているから、神も同じように本来自分自身のものでないもの、つまり、からだをお持ちになったと教えているのです。

何のためにでしょう？その説明が後に続きます。「これは、その死によって、**悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、：15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。**」と、ここにその目的が記されています。なぜ、神が肉体をもってこの世に來てくださったのか、14節に「これは、**その死によって**」とあります。つまり、神が私たちと同じ血と肉をもってこの世にお生まれくださった、罪は持っていなかったけれど私たちと同じ肉体をもってこの世に來てくださった、その誕生という行為が私たちに救いをもたらすのではないということです。「**死によって**」それが可能になるということです。だから、イエス・キリストは十字架で死なれたのです。イエスがこの世にお生まれになって80歳の人生を全うなさって亡くなられた、とこれでは私たちの罪の赦しなど備えられることはなかったのです。みことばは言います。「**その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、：15 一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。**」と、これは人間は生まれながらに死んでいる、死に向かっていると断言しています。つまり、私たちは生まれながらに肉体的に死を経験する者ですが、同時に、聖書を見ると霊的な死ということも教えます。神と関係のない人々、神を信じていない人々は神から祝福をいただくことはできないし、いのちの源である神からいのちをいただくこともできない、霊的に死んでいるというのは、いのちの源であり祝福の源である神と関係が全くない状態で生まれてきていると言うのです。肉体的に私たちは死ぬ者です。しかし、生まれながらに私たちはほんとうの神とつながっていない、その神を信じていないゆえに、神の祝福も神が備えてくださっている永遠のいのちもいただけない、そういう状態を霊的な死と言います。このような私たちに神は何をされたのでしょうか？「**悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし**」と、この「滅ぼした」というのは、その効力を失くする、無効にする、終わりにするという意味です。つまり、生まれながらの人間にとって死というのは恐怖です。肉体的な死だけでなく霊的な死はそれ以上に怖いのです。神から引き離されている状態の人がそのまま肉体の死を経験すると、ずっと神から引き離された状態で永遠を過ごすことになるからです。これこそ私たちにとって最も恐ろしいことです。なぜなら、その人はどこでその永遠を過ごすのか、聖書は教えています。神に逆らい続けている人は永遠をさばきの中、のろいの中、永遠の地獄の中で過ごし続けるのです。私たちは皆そのような運命をたどる者としてこの世に生まれて來ているのです。私たちは死に対してどうすることもできない、私たちの努力、私たちの力では不可能です。私たちが死について考えなくても確実に死は近づいてきています。そのような恐怖の中で生きてきた私たちに、神はその死から完全に私たちを救い出してくださいました。霊的に死んでいた私たち、神とつながっていなかった私たちがとの関係を神は修復して下さって、神と和解して、神の祝福、神のいのちをいただいて生きる者にしようと神はしてくださいました。ですから、もう「死」は恐怖ではなくなったのです。そのために神は人としてこの世に來てください、そして死んでくださったのです。私たちのためです。だから、こう言います。ヘブル2：16「**主は御使いたちを助けるのではなく、確かに、アブラハムの子孫を助けてくださるのです。**」と。つまり、人間を助けよう、人間を救おうとされたのです。天使たちではないのです。そうすると、イエス・キリストがこの世にお生まれになった、そして、その後十字架にかかって死んでくださった、この死によって、私たち人間は例外なくその罪が完全に赦されて、神の祝福をいただく者へと変えられた、と言えます。そのことをヘブル書の著者が私たちに教えてくれることです。

なぜ、神が人となられたのか、死ぬためなのです。神が身代わりとなって私たちが受けるべき罪の罰を受けてくださらなければ、私たち自身がその罰を受けなければなりません。しかし、そのさばきはイエス・キリストがこの私の代わりに受けてくださったのです。ここに赦しがあるのです。だから、ヘブル書の著者は言いました。「その死によって解放を与えてくれる、その死によって救いを与えてくれる」と。そして、イエスはもうすでに死んでくださったのです。私たちのためにすばらしい救いを備えてくださったのです。そのために神がこの世に産まれなければならなかったのです。なぜなら、人間の中で罪を犯していない人間はだれ一人いないからです。罪を犯している者が罪を犯している者の身代わりとなって死ぬことはできないのです。人間は皆、自らの罪の刑罰を受けなければいけないから、身代わりとなることができたのは罪のない方、神だけです。ここに救いが完成したのです。

天使は言いました。この産まれてくる男の子は救い主だ、罪からあなたを救ってくださる方だと。マタイは言ったのです。この方は人となられた神だと。だから、マタイに戻って、最後に24-25節、**「:24ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、:25そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。」**、ヨセフは**「その妻を迎え入れ」**と、彼女と生活することを決心し、彼女を自分のところに迎え入れるのです。そして、子どもが生まれるまで彼女と肉体関係を持つことがなかったのです。そして、子どもが生まれたとき、ヨセフは躊躇することなく、子どもに「イエス」という名をつけたのです。天使が命じたように…。ヨセフは確信していたのです。この生まれた男の子こそ私たちの罪を完全に赦してくださる救い主だと。この方こそ、このイエスという名に最も相応しい人物だと。救い主は生まれてくださった、救い主はあなたの身代わりとなって十字架の上であなたのさばきを受けてくださった、救いは完成し救いは備えられたのです。問題は、その救いをあなたのものとして受け入れるかどうかです。救い主は来られた、しかし、その救い主があなたの救い主でなければ、この祝福はあなたのものではないのです。

多く人はクリスマスの音楽を聞きながらその意味が分からない、多くの人々は話を聞いてもそれが自分のことでないかぎり、その祝福は自分のものとして味わうことができないのです。今日、心からお勧めすることは、このイエス・キリストの誕生を通して、あなたが愛されていること、あなたの罪が赦されることをしっかり覚えてくださることです。しかし、その赦しをいただくためにはあなたがそれを求めなければいけない、それを求めるとき、主は約束されたように、あなたの救い主となってすべての罪を永遠に完全に赦してくださいます。今日があなたの救いの日となるように心から願います。